

中間台木利用による‘高田梅’の寒凍害防止対策

誌名	東北農業研究
ISSN	03886727
著者名	斎藤,祐一 菊地,裕雄 永山,宏一
発行元	[東北農業試験研究協議会]
巻/号	46号
掲載ページ	p. 227-228
発行年月	1993年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



中間台木利用による '高田梅' の寒凍害防止対策

齋藤 祐一・菊地 裕雄・永山 宏一*

(福島県果樹試験場会津試験地・*福島県会津若松農業改良普及所)

Countermeasures against Controlling Cold and Freezing Injury
by Using Interstocks for Mume 'Takadaume'

Yuichi SAITO, Hiroo KIKUCHI and Kouichi NAGAYAMA*

(Aizu Branch Fukushima Fruit Tree Experiment Station・)
(* Aizuwakamatu Agricultural Extension Service Station)

1 はじめに

福島県会津地方で栽培されている '高田梅' は、苗木植栽後数年で枯死する事例が多く、園地化する上で重大な障害となっている。枯死の原因については、寒害、凍害及び胴枯病などが考えられるが、これまでの観察では寒害及び凍害の可能性が高い。枯死樹は主幹部に枯れ込み症状が認められ、この被害部位は地上60cm以下に集中している。これらの枯れ込みの原因が寒害や凍害であるとすれば、被害の集中する部位に耐寒性が強くしかも '高田梅' と親和性の高い中間台木を導入することにより、枯死防止の可能性が考えられる。そこで、各地で栽培されているウメ及びアンズ14品種を '高田梅' の中間台木として用い、中間台木の耐寒性、'高田梅' との親和性及び収量について比較検討した。

2 試験方法

1988年4月に市販のウメ及びアンズ苗14品種 (ウメ10品種、アンズ4品種、台木; 実生) を樹間1mで植栽し、同年8月に地上70cmの位置に '高田梅' を芽接ぎした。各品種15~20本供試し、1989年6月に活着状況を調査した。その後、1992年までの4年間の枯死状況と1991~1992年の収量について調査を行った。また、1992年11月に、中間台木と '高田梅' の接木部位から上下10cmの幹周を調査した。これらの調査は、調査時に生存している樹の全てについて行った。

試験期間中の管理については、中間台木部位から発生した新梢は夏期に切除し、穂木部は主幹形に近い剪定 (冬期) を行った。

3 試験結果及び考察

(1) 接木後の活着状況

接木後の活着率は、'新潟大実' 55%、'大野豊後' 60%とやや低かったが、この外の品種については、80%以上と良好であった (表1)。

(2) 枯死状況

枯死樹は植栽1年目から徐々にみられ、全体の傾向としては2~3年目にかけて枯死する品種が多かった。その状

表1 芽接ぎ活着状況

中間台木種	接木数 (本)	活着数 (本)	活着率 (%)
信濃小梅	20	16	80.0
前沢小梅	20	20	100.0
藤五郎	15	13	87.0
花香実	20	19	95.0
鶯宿	20	17	85.0
白加賀	20	18	90.0
梅郷	20	20	100.0
越の梅	20	20	100.0
豊後	20	19	95.0
大野豊後	20	12	60.0
新潟大実	20	11	55.0
ゴールドコット	20	18	90.0
八助	20	16	80.0
織姫	20	20	100.0

況については、毎年4~7月にかけて衰弱症状がみられ、同一品種の中でも個体により発現時期が異なった。芽接ぎ後4年間の枯死状況は、中間台木の品種間に大きな差が認められ、累積枯死率は、'豊後' 74%、'八助' 69%、'花香実' 68%、'信濃小梅' 62%とそれぞれ高かった。これらの品種は耐寒性が弱く、'高田梅' の中間台木としては不適と考えられた。一方、'鶯宿'、'藤五郎'、'前沢小梅'、'梅郷'、'越の梅' の枯死率は20%以下で、耐寒性が強いものと考えられた (図1)。

本試験では、供試品種としてアンズとウメを材料として用いたが、アンズ品種中からは '高田梅' の中間台木として耐寒性の強い品種は認められなかった。

(3) 台負け程度

台負けは植栽後2年目から現れ、1992年の調査では、'八助' 以外の13品種に台負けの傾向が認められた (表2)。特に、'花香実'、'梅郷'、'白加賀'、'信濃小梅' の台負けが顕著で、これらの品種の接木部位は異常肥大し、支柱を使用しないと栽培には不適と考えられた。

(4) 収量性

果実は1991年から結実したが、1991~1992年の収量は、中間台木の品種による差が認められた。供試品種の中で最も収量が低かったのは '越の梅' で、一樹当たり平均収量が2年間で200gに達しなかった。一方、'鶯宿'、'ゴールド

ドコット', '藤五郎' の収量は高く900g以上となった(表2)。

樹冠の拡大については本試験では計測しなかったが, 観察によれば '越の梅' や '織姫' 等収量の少ない品種は, '鶯宿' 等収量の多い品種に比べて樹冠容積が小さい傾向が認められ, 樹冠容積の拡大が収量に影響を与えたことが推測された。

4 まとめ

本試験は, 地際部に発生しやすい寒害及び凍害による '高田梅' の枯死を防止する対策として中間台木を用いることに着目し, 特にその耐寒性の強い品種の選抜を目的として実施した。

中間台木としては, ウメ及びアンズ14品種を供試し, その中から耐寒性に優れている品種として '前沢小梅', '藤五郎', '鶯宿', '梅郷', '越の梅' の5品種を選抜した。しかし, '梅郷' については, 台負けの傾向が顕著に認められ, 支柱を使用しないと栽培には不適と考えられた。また, '越の梅' については, 現段階においては収量性が他品種より劣るため, 樹齢が進んだ場合それが改善されるかどうかを検討する必要がある。

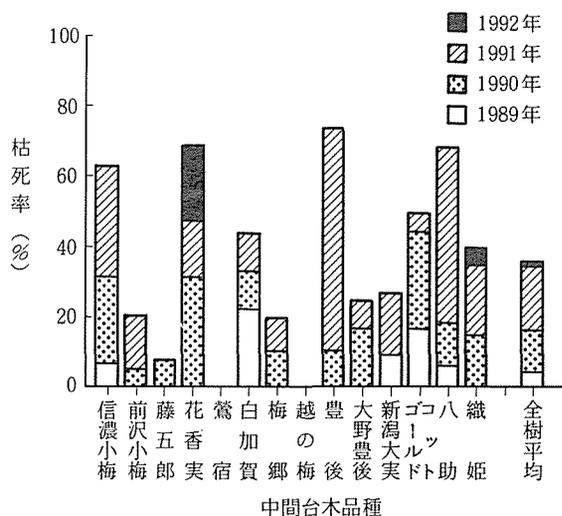


図1 年度別枯死状況

今後は, これらの中間台木を利用した場合の樹形, 樹冠の拡大, 結実等の調査を行い, 一般栽培と比較しながらその有効性を検討する必要がある。

表2 中間台木品種別生育状況

中 間 台 木 品 種	植栽本数 (本)	最終年次 生存率 (%)	一樹当たり収量 (g)		幹周 (cm)		台負け率 (%)	評 価
			1991年	1992年	台木部	穂木部		
信濃小梅	16	37.5	530.7	250.0	19.0	21.5	88.4	×
前沢小梅	20	80.0	467.5	221.9	22.3	23.1	96.5	○
藤五郎	13	92.3	520.8	400.0	19.4	20.2	96.0	○
花香実	19	31.6	362.8	138.8	18.3	21.7	84.3	×
鶯宿	17	100.0	650.6	388.2	20.7	21.9	94.5	○
白加賀郷	18	55.6	350.0	316.2	16.7	19.1	87.4	×
梅郷	20	80.0	501.1	287.5	16.2	19.0	85.3	△
越の梅	20	100.0	104.7	12.4	17.4	17.2	98.3	△
豊後の梅	19	26.3	231.7	92.6	21.1	21.9	96.8	×
大野豊後	12	75.0	150.0	38.8	15.9	17.3	91.9	×
新潟大実	11	72.7	384.4	265.6	17.8	17.9	99.4	×
ゴールドコット	18	50.0	535.0	410.1	21.1	21.3	99.1	×
八助	16	31.3	299.0	117.8	21.9	21.3	102.8	×
織姫	20	60.0	142.2	56.3	17.6	18.8	93.6	×

台負け率: 台木部/穂木部×100